

大会日時と会場のご案内

開催日：2025 年 9 月 13 日（土）～14 日（日）

会場：京都橘大学（京都府京都市山科区大宅山田町 34）・啓成館

アクセス：京都市営地下鉄東西線「柳辻（なぎつじ）駅」からは徒歩約 15 分です（柳辻駅から本学までの案内は、3 頁をご覧ください）。

山科駅・京都駅からキャンパスまでバスが運行されていますが、学休期間中のため本数が少ないうえに 13 日土曜日を除き、キャンパスまで乗り入れません。その際には、山科駅からは「大宅」下車、徒歩約 10 分、京都駅八条口からは「大宅中学校（京都橘大学下）」下車、徒歩約 7 分です。時刻・運賃などの詳細は、大学のホームページ（アクセス）、又は京阪バスのホームページをご覧ください。

参加者へのご案内

1. 各種申込について

（1）当日の参加も受け付けます。

当日参加に対する支払い額は、正会員 4,000 円、一般会員 3,000 円、準会員 2,500 円、非会員（一般）4,000 円、非会員（大学院生・学部生）2,500 円です。

（2）各種発表（口頭発表、自主シンポジウム、自主ラウンドテーブル）の申込は、既に締め切りました。

（3）昼食について

9 月 13 日（土）・14 日（日）両日は、学休期間中のため学内のコンビニ・学食が閉店となります。8 月 15 日までに弁当（お茶付き、1000 円）の申込みをされていない方は、8 月 31 日までに全国大会事務局に弁当を申し込むか、各人で昼食の準備をお願いします。

（4）情報交換会（懇親会）の申込について

当日参加も数名程度であれば受け付けます。当日の支払い額は、正会員・その他の出席者は 6,000 円、大学院生・学部生は 3,500 円です。

2. 会場について（4 頁～5 頁を参照）

（1）主会場：啓成館 1 階 G105 教室

（2）口頭発表など：啓成館 1 階 G101～104 教室、G106 教室（14 日 9：30～11：00 のみ）

（3）参加者控室・休憩室：啓成館 1 階 G106 教室（14 日 9：30～11：00 を除く）

（4）13 日、14 日の両日とも自家用車による駐車場の使用は出来ません。

3. その他

＜記念写真撮影のご案内＞

昼食前に記念写真撮影を行いますのでご参加ください（希望者のみ）。

日時：9 月 13 日（土） 12：20～

場所： 啓成館 G102 教室

＜情報交換会（懇親会）のご案内＞

日時：9 月 13 日（土）17:00～

会場：学内「クリスタルカフェ」

※新型コロナウイルス感染症は、この夏も患者が増加しています。手洗い等の手指衛生等の基本的感染対策のほか、不織布マスクの着用等の配慮をお願いします。新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては、プログラム内容等の変更の可能性がありますので、アナウンスや掲示、ホームページ等をご確認下さい。

＜口頭発表・実践発表のご案内＞

*今年度は WEB 抄録集のみで、冊子の配布はありません。必要に応じて各自学会ホームページよりプリントしてください。

＜発表者へのお願い＞

1. 指定された会場で発表を行ってください。発表要旨以外のレジュメや補足資料を使用する発表者は、各自で 20 部程度準備し、会場で配布してください。
 2. 発表者及び座長は指定された会場に 15 分前までに集まり、発表の運営について打ち合わせをしてください。また、機器動作をご確認の上、各自で操作をお願いします。
 3. 連名発表者も本大会に参加し、当該の発表と討論を活発に行ってください。
- 発表は、発表時間 25 分、発表後質疑応答 5 分で行います。

タイム合図 1 鈴・・・・発表開始後 20 分経過

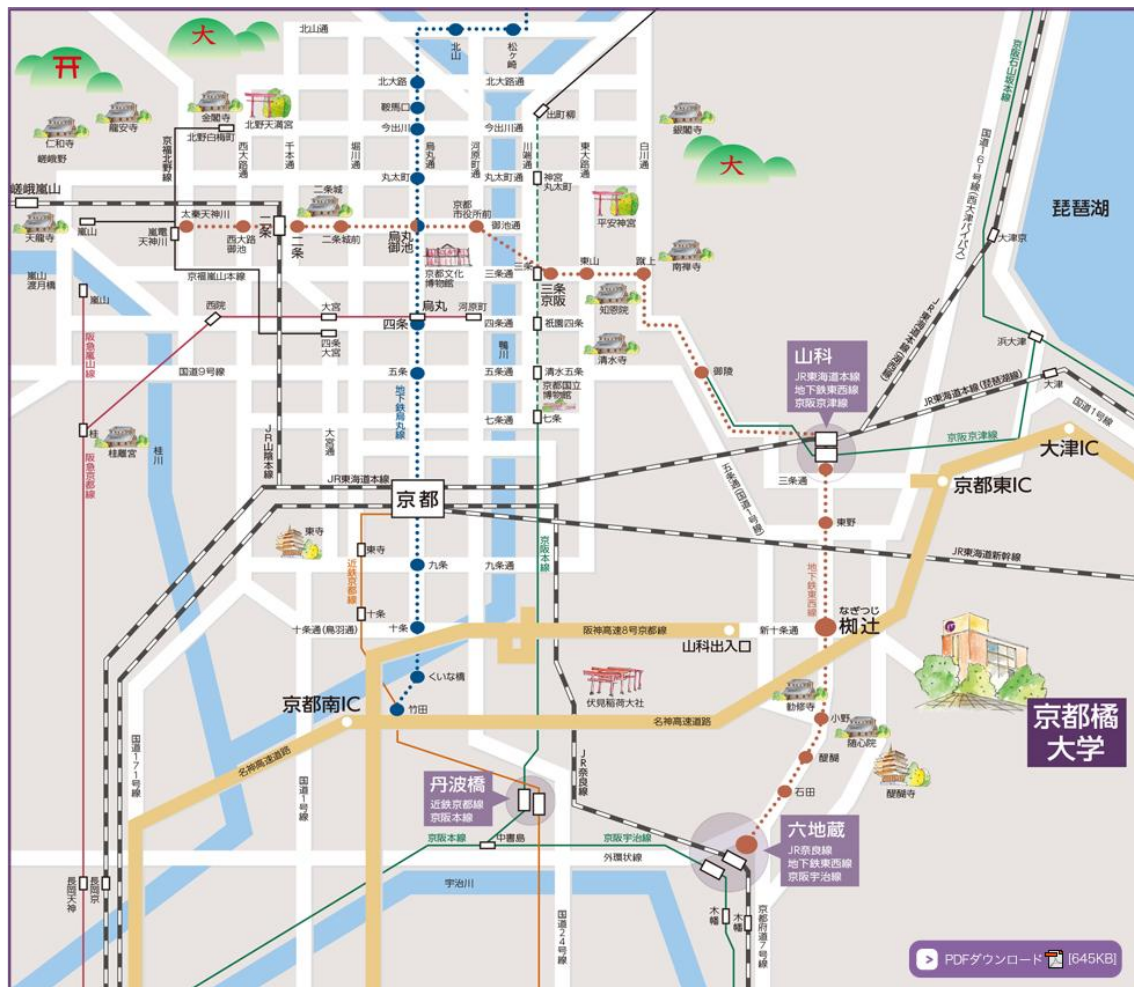
2 鈴・・・・発表開始後 25 分（発表終了）

3 鈴・・・・発表開始後 30 分（質疑応答終了・次の発表開始）

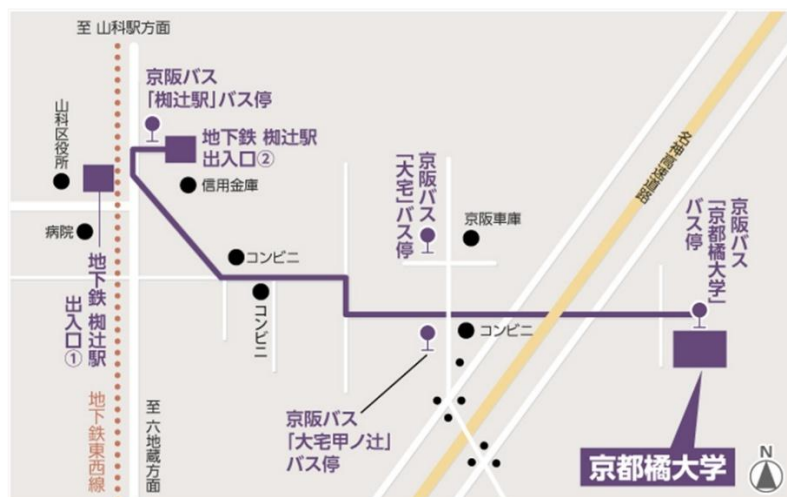
＜ 座長へのお願い＞

1. 座長は発表時間 15 分前に会場へお越しください。
2. 発表者が欠席（発表取り止め）の場合、学会事務局に直ちに報告してください。
3. 会場からの質問では、所属と氏名を述べてから質問するようにお伝えください。
4. 会場からの質問が少ないときは、座長は適宜質問をして、議論が深まるように配慮してください。
5. 座長は発表者に発表の仕方などに不適切な点がある場合は、適宜注意してください。
6. 発表のルール（時間厳守など）に適った発表が行われるように運営してください。

広域路線図



地下鉄「柊辻(なぎつじ)駅」から本学までの案内

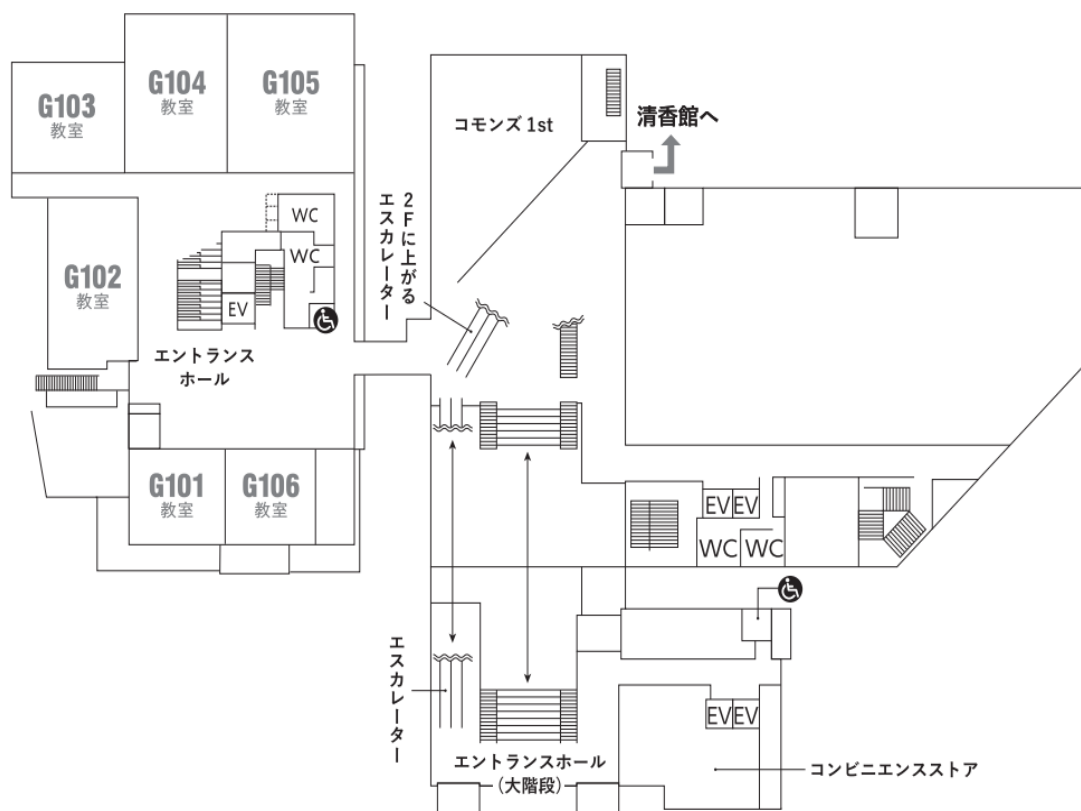


キャンパスマップ



※13 日（土）、14 日（日）の両日とも駐車場の使用は出来ません。

大会会場平面図（啓成館 1 階）



啓成館 1階	収容人数
G101教室	63
G102教室	120
G103教室	108
G104教室	105
G105教室	135
G106教室	63

「北風ロマンス」 （大会公式イメージソング）

作詞・作曲：吉本絵夢 編曲：東京シュガーキャッツ

この想いはそっと風に吹かれて散った
届かないんじゃないなくてさよならしたの

君の手の温かさが懐かしい
ホッカイロでは補えない温もりがあるの
夜中のハイウェイ駆けてギリギリを抱きしめて
こう言うの「愛(かな)しい」
この想いはずっと枯れやしないと思った
まさかね こんな風に立ち尽くすとは

君の横顔がとても懐かしい
おでこの出っ張りだとか鼻の丸みとか
寒さに耐えかねて 冷えた手が離れてゆく
こういうの悲しい？
この想いはそっと風に吹かれて散った
届かないんじゃないなくてさよならしたの

だってあなたはぎゅっと心に詰まった想いを抱いて
新しいコースで輝きだした光を

この想いはずっと枯れやしないと思った
まさかね こんな風に立ち尽くすとは
あなたが霞んでゆく春風吹く頃は
私も少し背伸びして会いに行こう

「日本人間関係学会第33回全国大会 プログラム」

9月13日（土曜日）（以下、会員敬称略）

- 9：30～ 受付開始
- 10：00～10：25 開会式【啓成館 G105 教室】（総合司会・伊賀吉郎大会副委員長）
開催校・大会委員長挨拶（山崎将文大会委員長）
理事長挨拶（早坂三郎理事長）
連絡事項（佐々木かなこ大会副委員長）
- 10：25～11：15 基調講演・山崎将文「人間と動物の新たな関係—大会テーマの趣旨説明を兼ねて—」【啓成館 G105 教室】
- 11：20～12：20 実行委員会企画① 特別講演・黒田幸也氏（黒田装束店社長・装束司）
「装束文化の継承—京都の御祭りをとおして」【啓成館 G102 教室】
- 12：20～12：30 写真撮影【啓成館 G102 教室】
- 12：30～13：20 昼食【啓成館 G101・106 教室】
- 13：20～14：30 実行委員会企画② 三好良子「人間力&関係力を磨く GWT（グループワークトレーニング）—一人は人と関わることで変わる—」【啓成館 G102 教室】
- 14：30～14：40 休憩
- 14：40～15：40 企画セッション・ラウンドテーブル
①加藤誠之・大住誠・目黒達哉・清谷典生「積極的に治さない心理療法—瞑想箱庭療法—」【啓成館 G102 教室】
②小上陽子・佐々木かなこ「ヴェーダから学ぶ人間の尊厳と共生—内なる自己を育てる—」【啓成館 G103 教室】
③香崎智郁代・立花直樹・灰谷和代・永野典詞「保育現場における『こども家庭ソーシャルワーカー』の検討—保育士等を対象としたアンケート調査を参考に—」【啓成館 G104 教室】
- 15：50～16：50 総会（人間関係士の説明を含む）【啓成館 G105 教室】
- 16：50～17：00 情報交換会（懇親会）会場へ移動【クリスタルカフェ】
- 17：00～18：40 情報交換会（懇親会）【クリスタルカフェ】
- 18：40 解散

「日本人間関係学会第 33 回全国大会 プログラム」

9 月 14 日（日曜日）（以下、会員敬称略）

8：30～	受付開始
9：00～ 9：30	①口頭発表・実践発表 101 教室・下記参照
9：30～10：00	②口頭発表・実践発表 × 4 教室・下記参照
10：00～10：30	③口頭発表・実践発表 × 4 教室・下記参照
10：30～11：00	④口頭発表・実践発表 × 4 教室・下記参照
11：10～12：00	西本泰久氏・齋藤汐海氏「PUSH（心肺蘇生）講習会」【啓成館 G102 教室】
12：00～13：00	昼食【啓成館 G101・106 教室】 学会賞・最優秀発表賞・奨励賞 選考委員会【啓成館 G103 教室】
13：00～14：00	実行委員会企画③ 特別講演・松原仁氏「人間は進歩した AI とどのような関係になるか」【啓成館 G105 教室】
14：00～15：30	シンポジウム「新たな人間関係の構築に向けて」（シンポジスト・目黒達哉・三好良子・早坂三郎、コーディネーター・永野典詞）【啓成館 G105 教室】
15：30～15：45	学会賞・最優秀発表賞・奨励賞表彰式、次回全国大会案内【啓成館 G105 教室】
15：45～15：50	閉会の辞【啓成館 G105 教室】
15：50	解散

*口頭発表・実践発表（13 人・グループ）

教室 時間	啓成館 101 教室 座長：目黒 達哉	啓成館 106 教室 座長：森 千佐子	啓成館 103 教室 座長：谷川 和昭	啓成館 104 教室 座長：早坂 三郎
9：00～9：30 ①	第 1 発表 永野 典詞			
9：30～10：00 ②	第 2 発表 原子 純	第 5 発表 末國 明美	第 8 発表 藤田 毅	第 11 発表 中川 祐志
10：00～10：30 ③	第 3 発表 立花 直樹	第 6 発表 白石 京子	第 9 発表 加藤誠之・中尾忍	第 12 発表 広田 佳与子
10：30～11：00 ④	第 4 発表 田中 典子	第 7 発表 丸谷 充子	第 10 発表 大森 孝志	第 13 発表 田中 康雄

【啓成館 G101 教室】座長：目黒 達哉 副座長：永野 典詞

- 第 1 発表・永野典詞「保育ソーシャルワークと人間関係の関連性について ―学生へのアンケート調査からの検討―」
- 第 2 発表・原子純「幼児の育ちと幼小接続― 幼児の小学校行事への参加から ―」
- 第 3 発表・立花直樹「保育施設における障害児保育の現状と課題―保育者に対するアンケート調査から―」
- 第 4 発表・田中典子「本人と家族が担う不登校の身体症状の見えにくさ―経験過程から本人と家族が求めていること―」

【啓成館 G106 教室】座長：森 千佐子 副座長：丸谷 充子

- 第 5 発表・末國明美「医療従事者の喫煙習慣とストレス―医療従事者多職種におけるアンケート結果より―」
- 第 6 発表・白石京子「5 歳児健診からみえる子どもの発達相談としくみ I―パイロットスタディとしての K 市の現状と心理相談の検証―」
- 第 7 発表・丸谷充子「市区町村母子保健に携わる保健師の連携―保健師へのインタビュー調査から―」

【啓成館 G103 教室】座長：谷川 和昭 副座長：加藤 誠之

- 第 8 発表・藤田毅「森尚水地域教育実践の検討」
- 第 9 発表・加藤誠之・中尾忍「歴史教育者による『生きた歴史学』の試み―歴史教育者協議会による『福田村事件』の掘り起こしを題材として―」
- 第 10 発表・大森孝志「キリスト教の教会内における人間関係―赦し合うことについて―」

【啓成館 G104 教室】座長：早坂 三郎 副座長：三好 明夫

- 第 11 発表・中川祐志「架空の物語の登場人物の言動から見る自閉スペクトラム症(アスペルガー症候群)的特性―『ウマ娘プリティダービー』よりミホノブルボンから―」
- 第 12 発表・広田佳与子「日本のランドスケープは少子高齢化に伴いどこに向かうか―欧米と日本の相違―」
- 第 13 発表・田中康雄「外国人技能実習生に対する介護老人福祉施設の人材育成システムの開発―インタビューおよび全国アンケートの調査結果をエビデンスに―」

一般社団法人日本人間関係学会第 33 回全国大会

テーマ「新たな人間関係の構築に向けて一人間の尊厳を問い直す―」

「開催校・大会委員長挨拶」

大会委員長 山崎 将文(京都橘大学)

[大会テーマの趣旨説明]

従来から人間関係と言うと、人と人の関係であることに疑問をさしはさむ余地は全くありませんでした。ところが、最近、これに対して疑義が呈され始めています。というのは、人間関係にいう人のなかに、動物やA I も含まれるのではないかという主張がなされているからです。

動物について言えば、身近なところでは、ペットの犬や猫などを家族の一員とする動きがあります。例えば、小学校の家庭科の教科書で、ボクの家族としてペットを入れた図を載せたものが出版され注目を集めました。また、私の専門の法的観点からすると、アルゼンチンの連邦裁判所はオラウータンに人身保護令状をだしていますし、我が国の裁判所でもペット犬が事故で死んだ場合、加害者による飼い主の愛着利益(人格的価値)の侵害として慰謝料請求を認めています(動物のヒト化?)。

一方、A I について、カーツワイルは、2029 年にはA I が人間並みの知能を獲得し、2045 年には人間の知能を大幅に上回るA S I が脳とつながること(人間とA I の融合)で、人間はいままでの数百万倍の計算能力、記憶力、その処理スピードを手にすることができるという未来予測をしました(シンギュラリティの到来)。法的な観点からは、A I を用いた意思決定やそれによって生じた事故についてのルールや責任について論じられ始めていますが、その中でA I に法人格を認めていくべきという考え方がE U 議会で提案されたことがあります。わが国の民法では、権利の主体は、人(自然人)と法人としているがゆえに、A I が法人格をもつとA I も権利主体の一つになります(A I のヒト化?)。

他方、肝心の人間はと言うと、人間関係の希薄化が指摘されています。家族関係、友人関係、学校・職場の人間関係、それに地域でのつながりなど、様々な場面で人間関係の希薄化がみられます。その原因はいろいろ考えられますが、例えば、ITやSNSの普及、核家族化や単身世帯の増加などの家族構成の変化、都市化、そして働き方の変化や生活様式の多様化、最近ではコロナ禍による社会活動の制限などが考えられます。

動物のヒト化やA I のヒト化及び人間関係の希薄化のような変化が生じている現代社会において、改めて人間とは何か、とりわけ人間の尊厳とは何かが問い直されていると言えるのではないのでしょうか。日本人間関係学会第 33 回大会のテーマを「新たな人間関係の構築に向けて一人間の尊厳を問い直す―」としたのは、このような理由により

ます。

[京都橘大学について]

ところで、大会が開催されます京都橘大学の前身は 1902 年に京都女子手藝学校として創立され、1967 年に橘女子大学（文学部の単科大学）として開学されました。1988 年に大学名を京都橘女子大学、2005 年に男女共学化し大学名を京都橘大学に改称し、現在、9 学部 15 学科を擁する中規模の総合大学となっています。来年度にはデジタルメディア学部、工学部ロボティクス学科、健康科学部臨床工学科の設置を目指しています。

また、大学キャンパスは、山科盆地を一望できる緑豊かな音羽山の麓にあり、全学部がこの地にコンパクトに集結しています。山科は山階とも書き中臣鎌足から始まる藤原氏との結びつきも強く、NHKの「ブラタモリ」で紹介されたように、京都と東日本をつなぐ交通の要衝でもあります。大学の周辺には、小野小町が晩年住んでいたといわれる随心院や、豊臣秀吉が行った「醍醐の花見」で有名な醍醐寺や、大石内蔵助の隠棲の地と伝えられる岩屋寺など歴史ある古刹が点在しています。

さらに、京都は 794 年の平安京の遷都以来、皇室とともに反映してきた長い歴史があります。全国大会の前日（9 月 12 日金曜日）のエクスカーションでは、京都迎賓館のガイドツアーなども予定されています。

最後に、本大会が会員の皆様にとって有意義なものとなりますように大会委員一同、準備を進めて参ります。多くの皆様の全国大会へのご参加を心よりお待ち申し上げます。

「理事長挨拶」

日本人間関係学会理事長 早坂 三郎（甲子園短期大学）

本年度の日本人間関係学会第 33 回全国大会を「新たな人間関係の構築に向けて一人間の尊厳を問い直す」のテーマのもと、山崎将文京都橘大学健康科学部救急救命学科教授を大会委員長として、京都橘大学を会場に開催されますことを欣快に存じます。

昨今は SDGs の世界的取組みに見られますように自然環境の人為的破壊と地球温暖化から台風や線状降水帯なる気候変動、更には巨大地震の予兆現象の頻発、そして何より世界各所に現れている自国優先主義の台頭と拡大化している国際間紛争による多大な犠牲の増大、加えての猛烈な勢いで進む AI 化の波は、ホモサピエンスとして集団化しての活動の基盤となるコミュニケーションと人間関係の展開に続いた文明の展開とその後の経済化や印刷を始めとする発明・発見による活動の多面化、そして核に代表されるエネルギー開発の問題などのこれ迄の進展が既述の現状と相俟って、ますます先が見え難い状況にあり、これからの世の中を大きく質的にも変えていくことは必至です。

その変革期の始まりにあって今回の全国大会のテーマは誠に時宜を得たもので、日本人

間関係学会として改めて問い直さなければならない大命題であります。そのため本学会では「人間関係士」の資格養成体制のリニューアルに取り組んでおり、研修のためのガイドブックの編集をはじめとして準備を整えているところであります。

どうかこれからの日本人間関係学会の活動に、またコミュニケーションと人間関係の展開に寄与する研究と諸活動に倍旧のご尽力を賜りますようご理解とご協力をお願い致しまして、全国大会の開催へのご挨拶とさせていただきます。

尚、全国大会の前日（9月12日^金）のエクスカーションでは、京都迎賓館のガイドツアーなども計画されていますので、併せまして多くの皆様の全国大会へのご参加を心よりお待ちしております。

基調講演 【啓成館 G105 教室】

「人間と動物の新たな関係—大会テーマの趣旨説明を兼ねて—」

大会委員長 山崎 将文（京都橘大学）

近年、人間と動物との関係の捉え方に変化がみられます。動物を人と見る者が出てきているからです。身近な例でいうと、自分が飼っているペット（愛玩動物）を家族の一員（人と同列）と見做す者がいます（看護師とは別に愛玩動物看護師という新たな国家資格も誕生しています）。

のみならず、動物を人と見る動きは法においても存在します。例えば、インド政府は、イルカ水族館の開設を許可しない旨の決定をした際に、イルカは人間ではない人格（non-human persons）とみなされるべきとの理由をあげました。わが国でも、事故でペット犬が死んだ場合、裁判上、飼い主の慰謝料＝愛着利益が認められるケースがあります。ペットについて、財産的価値だけでなく、人格的価値が付与されてきているといえます。

こうして、従来、人間関係が人と人の関係であることを疑う余地は全くありませんでしたが、最近、その人と人の関係の中に動物が入り込む余地が出てきています。本講演では、人と動物（人に近い存在）との新たな関係について、動物の法的地位から考察してみたいと思います。

プロフィール 2015 年より京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科教授を経て、2016 年より現在まで京都橘大学健康科学部救急救命学科教授。

【論文】「イルカに権利はあるか—イルカの法的地位と権利—」：法政治研究(6)（関西法政治研究会）2020 年、「動物の法的地位—憲法の観点からの考察を含めて—」：九州法学会会報 2019（九州法学会）2019 年、「動物の権利と人間の人権」：法政論叢 54(2)（日本法政学会）2018 年など（いずれも J-Stage で閲覧可能）。

実行委員会企画① 特別講演

黒田幸也氏（株式会社黒田装束店社長・装束司）

「装束文化の継承—京都の御祭りをとおして」

今年度の大会開催校が京都橘大学であることから、「京都らしい企画を」との声が寄せられました。“観光都市京都 “への関心の高さはあるものの、知り尽くされた観光に焦点を当てた内容では会員に満足してもらえないと考えた結果、京都の特色の一つである「みやび」を創造してきた「装束文化」に触れていただこうと思いました。

京都を代表する葵祭や時代祭りをニュース等で、目のあたりにされたことがあると思います。その行列の雅やかで厳かな雰囲気を出している斎王代や平安王朝公家貴族の衣装と工芸品を扱い、祭りの設営を担っているのが装束司です。

今回の企画にあたり、特に印象深く感じたのは、装束の布地の文様が「祈り」を図案化していることでした。今日の伝統文化と言われる由縁を調べても「祈り」が根底に秘められていることが分かります。つまり、日本文化には、自然をモチーフにしながら、祈り、安寧、調和の思いが込められていることを改めて知りました。会員の皆様には平安王朝の「みやび」に秘められた真髄に触れていただきたいと思います。

今般、ご講演いただく黒田幸也氏は、黒田装束店 19 代目の当主をされています。店は、京都御所堺町御門前に江戸の初期から 400 年以上営まれている老舗であり、現在も有職故実に則した装束と神職が身に着ける神祇装束の調進に邁進しておられます。

これまで、私たち一般人があまり触れることのなかった伝統文化「装束」を知り、今につながる祭りを通して、日本文化の新たな学びとなれば幸いです。

（文責 企画委員 佐々木かなこ）

実行委員会企画②

三好良子（産業能率大学総合研究所・日本 GWT<グループワーク・トレーニング>協会長）

「人間力&関係力を磨く GWT（グループワーク・トレーニング）一人は人と関わることで変わる」

GWT とは、グループ（G）に与えられた課題（W）を目的に合わせて練習・訓練（T）をするラボラトリー方式（実験室）の体験学習です。楽しい財（演習）を解決していく過程で、協力したり葛藤を乗り越えたりすることで、自分や他人の言動・感情・考えなどに気づき、参画協働意識を養成し学び合う技法です。人は関わることで変わります。気づくことは変わることです。グループ体験を通して人と出会う中から、新たな自分自身や他者・集団・人間理解を深めて人間力や関係力を磨いてみませんか。

グループワーク・トレーニング、体験学習（ラボラトリーメソッド）、気づく、コンテンツとプロセス

1. 「人生山あり谷ありの越境術」

人生で出会うライフイベントは、多かれ少なかれストレスフルの谷に陥るものです。貴方の夢とロマンを具現化する為には、へこたれずに可能性のある全ての道を切り拓いて歩みを進めていくタフネスという杖が必要です。どんな世界に飛び込もうとも生き抜く為には人間力と関係力がもれなくセットでついてきます。“人間の悩みの殆どは人間関係だ、”という賢者もいるくらいですから人間関係力のアップデートは見逃せないのです。

だからといって人生経験値を増やそうと、今流行りの「越境学習」を個人で開拓するには負荷がかかり過ぎますし、そもそも所属する組織の心理的安全性がなければ不可能に近いアプローチになります。

時代は大人も一生学び続ける‘リカレント教育’を推進しています。その上、知識習得型や座学講義型では学べないことは立証されています。グループで課題を解決するワークに参画して振り返り、その内省を未来に繋げる GWT は、“いつもとは違う場所に身を置き・これまで知らない世界に出会い・普段のやり方から飛び出す、越境学習のミニ版体験を通して、これまでの自分から解放され、学び直し・学び崩し・学び始めが可能となります。

2. 「人は人と関わることで変わる」

そこでおすすめしたいのが、「グループワーク・トレーニング」の手法と学び舎です。

GWT とは、グループ (group) に与えられた課題 (work) を、目的に合わせて練習・訓練 (training) をするラボラトリー (実験室) メソッド (方式) の体験学習のことです (略称: GWT)。グループが本来持っている力やメンバー間の相互作用を活用することで、グループの動きやお互いの言動に気づくトレーニング方法です。目的は、組織の一員として集団の目的達成に向けて自主的に参画し、その責任を分担する協働者としての参画協働意識を高めることにより、人間関係構築力を養うことにあります。このグループワーク・トレーニングは、人と人との間を豊かにする術を身につける為の技法でもあり、人は関わることで変わり、気づくことは人が変わる可能性に繋がります。

よって、グループ体験を通して、人と出会う中から真の自分に出会い、人間力と関係力を磨く為に、体験後の振り返りと気づきの交換を通して得た学びを、明日からの日常に活かすことを狙いにしています。

3. グループワーク・トレーニングの効果

アドバイザーによる支援を受けながら、グループの持つ力を活用し、個人とグループの成長を図った上で、人間形成をめざした行動変容を促進します。また、自己への気づきを能動的に行うと同時に、他者を肯定的に受容して、ソーシャルスキルの修得をめざします。

グループワーク・トレーニングの体験と相互学習の振り返りを日常で活かす‘一般化’に重点を置き、自分のあり方を学習して人間的成長を図ります。

すなわち、自分に気づく→他者・メンバーに気づく→グループの状況に気づく→グループの一員として適切で効果的な行動をとる。という流れを通して、組織を成長・変革させる力を養い、自律した人間育成をめざしています。

4. 理論のベース

グループワーク・トレーニングの理論と方法の歴史的な基礎は、構成的Tグループのカテゴリーに属し、クルト・レヴィンのグループ・ダイナミクス（集団力学）理論に基づいています。クルト・レヴィンの変革理論「解氷から再結氷へのプロセス」とは、自分自身の態度や行動について、予想もしなかったデータが出たり、自己像の崩壊やイメージの混乱に直面したりすると、大きな不安や恐れを抱くこともあります。しかし、グループ内の支持的かつ許容的な雰囲気と心理的安全性があることによって、周囲からのフィードバックを通して他人から見た自分の姿を‘今・ここで’気づくことが可能になり、理想の自分の姿をイメージして、新しい行動様式を統合できるようになります。

また「コンテンツ（内容）とプロセス（過程）」も重要な気づきのポイントです。氷山の一角で例えてみると、水面上に出ている部分がコンテンツです。表面に出て見えやすい場所にある為、耳を傾け注目することが簡単に出来ませんが、氷山の大部分は水面下に埋まっていて見えにくいことが多いのです。これがグループの中で起こっているメンバー間の感情の動きや関係性にあたるプロセスなのです。

従って、この水面下の‘プロセスに気づき、プロセスから学ぶ’ことが大切なのです。

5. 共同体感覚を醸成する

体験学習（ラボラトリーメソッド）を通して、今置かれている枠を超えて異なる環境に身を置き、新たな人脈や知識やスキルや視点や価値観に触れる絶好の機会提供の中から、自分再・新発見＋他者認知＋共同体感覚に気づき、人間力が磨けます。その上、トレーニングといっても、きつい課題や試練を与えられて扱きの中で耐え抜くのではなく、異業種交流の初対面同士、笑いの渦の中で、これまでの学校教育や社会人研修では中々教えてもらえなかったり遭遇出来なかったりした体験的なトレーニングを通して、ソーシャルスキルをバージョンアップできます。

6. 気づきと振り返りの感度を磨く

GWTは、‘いかに気づける’を大切にしています。‘気づくことは変わる事。気づけないと変わらない’のです。自己満足な偏見に満ちた利己主義な気づきは、どんなに気づいても不毛です。それに気づかせてくれるのは、他者からのフィードバックにほかなりません。

「私はあなたをこう見ました」とか「あなたにこんな言動がありました」など、自分では気づかず死角になり盲目になっている考え方や立ち居振る舞いやリアクションの仕方を非難批判ではなく、振り返りとして提供してもらえるのは実に有り難いものです。普段の生活や職場ではネガティブな余韻が残りますが、利害関係のない学習仲間からのメッセージは後腐れなく素直に響き、明日への活力である“一般化・日常化”として前向きなアクションプランに繋がります。

7. 「人生 enjoy 能力開発をめざす」

共創の時代に世界が求める人材に必要な能力アップ（自他認知の聴き方&伝え方、多様性を活かす合意形成、包括的なサポート力、アンコンシャスバイアス、建設的な自己表現、ア

ンガーマネジメント、ワークライフバランス、リーダーシップ、コーチング等々)をめざし、セルフマネジメント力や現場力を高め、リカレント教育にも活かせる GWT を体験してポジティブレシピの達人になりませんか。

企画セッション・ラウンドテーブル

①「積極的に治さない心理療法—瞑想箱庭療法について」

○加藤 誠之（高知大学）
大住 誠（大住心理相談室）
目黒 達哉（仁愛大学）
清谷 典生（同朋大学大学院）

最近の我が国では学校教育にもカウンセリング・心理療法が導入されています。しかし、カウンセリング・心理療法は専門的技術をもってクライアントの内面に踏み込む侵襲性を持っており、その副作用は無視できません。

今回は大住誠会員（大住心理相談室）を中心にクライアントへの侵襲性を排した新しい心理療法「瞑想箱庭療法」についてラウンドテーブル形式で論じます。

②「ヴェーダから学ぶ人間の尊厳と共生—内なる自己を育てる—」

<趣旨説明>

ヴェーダ哲学には、「人が幸福に、尊厳をもって、他者と調和的に生きるための教え」が多く含まれています。

他者との関係が揺らぎやすい現代において、本当に大切なのは「自分自身とのつながり」です。このセッションではヨガ哲学やヴェーダ哲学の視点から、人間の尊厳とは何かを問い直し、うちなる尊厳を育むことがどのように他者との関係性を見つめ直すことになるのか、また共生の力とは何かを探ります。

ヨガ哲学についてのお話と簡単な呼吸法、瞑想の実践を通して、内なる尊厳を認識し、他者の中にもそれを見出して調和的に生きる道について皆さんとお話したいと考えています。

小上陽子 プロフィール

ヨガ講師、ヨガスタジオ TAMISA（株式会社 TAMISA）代表、株式会社 YInYang 代表。
小・中学校、高等学校等への出張授業多数。少年院、鑑別所等で非常勤教誨師も務める。
（幼い頃から、人の心の動きと行動の関係性に深い関心を持ち、探求を続けている。自身の内なる在り方が周囲の人々に直接的に影響することを体感し、心を観察し平穏に保つこ

とが、周囲との関係を調和へと導く鍵であると実感している。ヨガや呼吸法、瞑想を日常生活の中で実践することで、自分自身を客観的に観察し、心の波を穏やかに保つ術を学び続けている。この学びと気づきを、指導を通して共有し、必要な方に寄り添えることを願いながら日々取り組んでいる。）

佐々木かなこ（大学非常勤講師）

人生 100 年時代と言われている昨今、長きにわたって組織で就労している者として、「シニアキャリアデザイン」がもつばらの関心ごとです。高齢人口が増えている現在、雇用面でも継続して働く条件に、65 歳の定年延長や 70 歳までの雇用努力義務が課されるなど、社会は変化しています。しかしながら、働き続ける本人の心身の健康や職場での人間関係の在り方など、高齢者の立場から日々思うことがあります。

本大会のテーマである「新たな人間関係の構築に向けて一人間の尊厳を問い直す」を、個人レベルで考えてみると、人との関わりとともに、高齢者としての自身のあり方を問うことも大事だと考えます。

4 年ほど前から、ヨガに関心をもち、機会あるごとに体験を積み重ねてきました。その目的は、「心身の健康とマインドのバランスを保つ」ことでした。寄る年波、先への不安や気力、体力の減退、そして、職場の若い人たちとの柔軟な関係性も自己の課題です。

ヨガは世界保健機関（WHO）の認定を受け、根幹にヴェーダ哲学（ヴェーダは知識の意）があり、予防医学の知恵と人生哲学が融合され、普遍性と人間の本質に関わる深い思索があるといわれています。古からの知恵に触れ、ヨガの実践（今回は呼吸法、瞑想）を通して、心地の良い暮らしをめざしたいと考えます。

今般、ご指導くださる小上陽子先生は、2000 年以来 20 年間以上、揺るぎない研鑽、研究をして来られました。現在、ヨガの第一人者として、インド政府の企画による国内外の催事に貢献されるなど、公共的な活動を主軸に据えて幅広く活躍されています。

この機会を通して、新たな視点の気づき、自己研鑽につながれば幸いです。

③「保育現場における『子ども家庭ソーシャルワーカー』の検討―保育士を対象としたアンケート調査を参考に―」

○香崎 智郁代（九州ルーテル学院大学）

立花 直樹（関西学院短期大学）

灰谷 和代（静岡福祉大学）

永野 典詞（九州ルーテル学院大学）

<研究背景と目的>

保育現場における保護者支援・子育て支援の必要性については広く指摘されている。2017年度から開始された保育士等キャリアアップ研修には「保護者支援・子育て支援」の科目が組み込まれており、保育士等の子育て支援に係る知識・技術の向上に向けた取組も進んでいる。自治体によっては、社会福祉士等の資格を持った「保育ソーシャルワーカー」を保育現場に派遣したり、現場の保育士が研修を受講し、子育て家庭の福祉課題に対応する支援員となる制度を創設したりする等、独自の取組も行っているところもあり、保育現場での保護者支援・子育て支援を誰がどのように担っていくかはいまだ明確な整理はされていない。そのようななか、2024年4月、こども家庭福祉分野で働くソーシャルワーカーの専門性向上を目的とした認定資格である「こども家庭ソーシャルワーカー」研修が開始された。取得ルートは、保持資格や経験によって4つに分かれており、そのなかには、保育所等で相談援助を4年以上経験した職員を対象としたルート（保育所等保育士ルート）が開設されている。しかし2025年3月に実施された第1回資格試験において、保育士等ルートの受験者数は31人であり、他のルートを大きく下回る結果となった。

本ラウンドテーブルでは、保育士等を対象とした「こども家庭ソーシャルワーカー」の取得に関するアンケート調査結果から保育士等が実施している保護者支援・子育て支援の現状や課題、キャリアアップ研修の受講状況とともに、資格の認知度・関心度について情報を提供する。それらの結果を基に、今後の保育現場における該当資格の取得や支援の在り方を検討する機会としたい。

「PUSH（心肺蘇生）講習会」

西本 泰久 先生・齋藤 汐海 先生

「PUSH（心肺蘇生）講習会」は、心肺蘇生の中でもっとも重要な胸骨圧迫とAED（自動体外式除細動器）の使い方を身につけることで、突然倒れた人の救命率向上をめざすことを目的としています。西本泰久先生（医師教員）と齋藤汐海助教（救急救命士）の指導の下、受講者は、二人一組で交互に胸骨圧迫（心臓マッサージ）などを行います。また、救急救命学科の学生3名がAEDをどのように使用したらよいのかを説明します。

一昨年まで本学の教授であり、大阪ライフサポートの理事長（現・副理事長）であった西本泰久先生は、PUSHには、①胸をPUSH（胸骨圧迫）、②AEDのボタンをPUSH、③あなた自身をPUSH（倒れた人に声を掛ける勇気、自分の背中押す）という3つの意味が込められていることを説かれています。

なお、受講者には、修了書が手渡される予定です。

実行委員会企画③ 特別講演

松原 仁 先生（京都橘大学）

「人間は進歩した AI とどのような関係になるか」

京都橘大学は、関西屈指の情報教育研究拠点をめざし、2023 年 10 月には情報学教育研究センターを開設しました。この情報学教育研究センター長に就任されたのが、工学部情報工学科教授の松原仁先生です（先生は、人工知能学会元会長・情報処理学会副会長でもあります）。

「松原先生は、人間と AI やロボットがしなやかに融合していく未来を思い描いているそうです。ただ、そのためには人間が AI をコントロールしていかなければなりません。AI と共に生きる社会では、これまで以上に『人間』について考える時代にもなりそうです」。「人間とはなにか。自分とはなにか。この問いを自問自答しながら、AI やロボットと共生する」社会について、講演ではお話いただけるのではないかと思います（京都橘大学ホームページ上より引用・抜粋）。

Profile

東京大学大学院情報工学専攻博士課程修了。通商産業省工業技術院電子技術総合研究所（現産業技術総合研究所）、公立はこだて未来大学教授、東京大学教授を経て、2024 年 4 月から京都橘大学教授。専門は人工知能。ゲーム情報学、観光情報学研究に取り組む。人工知能学会元会長、情報処理学会副会長。『AI に心は宿るのか』（集英社インターナショナル）など著書多数。

シンポジウム

「新たな人間関係の構築に向けて」

<趣旨>

第 33 回全国大会の開催地京都は、日本の西と東のあらゆる面での大動脈を繋ぐ、そして政治・経済・産業のみならず文化の淵源の地であり、且つはその展開を続け今日に至っており、今後も古の伝統から時代の先を行く役割を担うであろうことは疑いの余地もなく、まさに日本を代表する都市といえます。

その地での全国大会の開催であることと、地球全体がまさに混迷の時期にあることから今回大会のテーマである「新たな人間関係の構築に向けて」に鑑み、変革期における新たな人間関係の構築に向けての「シンポジウム」を開催したいと企画しましたので、ご参加頂ければ幸いです。

<シンポジスト>三好良子・目黒達哉・早坂三郎

<コーディネーター>永野典詞（九州ルーテル大学）

「出会い・語り合い・学び合い」

三好 良子（産業能率大学総合研究所・日本GWT<グループワーク・トレーニング>協会理事長）

複雑で価値観の多様化する今、勇気と慎重さ、標準化と現場適応、個の創造性とチームの協働など、これらの一見矛盾する要素を、どう調和していくのかが試されている時代です。

すなわち個人としてだけでなく、チームや組織といった集団において、自分たちで実現したい未来を仲間達と共創する礎を固めることから始めて、その関係性や存在意味を問い直すことが新しい常態や基準の定着と進化へと繋がります。

そこに「人間関係士」という存在は、時代のパイオニアとして貴重なキーマンとなっています。

私自身が人間関係士として「どのように世の中に関わり働きかけをしてきたか」をご紹介することで新たな人間力と関係力構築や次世代育成にお役に立つのであれば幸いです。

「今、改めて聴くことの大切さを問い直す」

目黒 達哉（仁愛大学 人間学部 心理学科 特任教授）

現代社会は SNS 等でのコミュニケーションが増加し、対面でのそれが減少傾向にあります。たとえば、会社で社員同士が同じフロアにいらながらもメールで用事を済ませ、対面で会話を避けているように見受けられます。その結果、齟齬が生じるケースもあります。

だからこそ、今、改めて対面的コミュニケーションの必要性に迫られるのです。

聴き手と話し手は相互に影響し合い、それによって人間関係の深まりが生じると考えます。家族、職場そして地域社会で、相互に傾聴し合うことによって共生関係が生まれると思います。その結果、精神的に豊かな人間関係を可能にし、安全安心なまちづくりに貢献すると考えます。

「生き甲斐と利他」

早坂 三郎（甲子園短期大学）

ヒトは常に利便性の向上を目指し効率化を進めてきましたが、斯くすれば人間関係が希薄化していくのは必然ともいえましょう。

さて、希薄化は何時から何故始まったのでしょうか？つまるところ、コミュニケーション不足や頼れる人がいないとか相談できる人がいなくなってきたためとも考えられます。

人は人によって人となってきましたが、過去に聴き、今を生き、未来を創り上げていく存在で、そこにはコミュニケーションと人間関係が母体であり、科学の発達の介在を要しました。

さて、海外の研究チームの調査では、日本の幸福度は調査国の中の最下位で、それは“親しい人が少ない”からと報告されています。

幸せと利他的行動の視点から、私たちは何を求めて生きているのか、コミュニケーションと人間関係の構築に向け考えてみましょう！